

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2021年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	松尾 哲矢
研究課題名	ボディビル競技における「のめり込み」を惹き起こす要因とその過程に関する実証的研究	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 博士課程前期課程2年	堀田 文郎
研究期間	2021年度	
研究経費	100千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はボディビル競技者が競技へののめり込む要因とその過程について明らかにすることを目的とした。そこで本研究では「肉体と競技者」「競技者と競技空間」「競技空間と生活空間」という3つの位相に着目して分析枠組みを設定し、11名の競技者に対するインタビュー調査を実施した。その結果、競技者にとってボディビル競技は「抛りどころ」と化していること、そうであるがゆえに競技者は「成長」無くしては心的な安定性を維持することのできない存在と化している様相が看取された。一方で、競技者が成長を維持するためには、肉体に対する投資を拡大させ続けなくてはならず、このことが競技に対するのめり込みへと帰結していると結論された。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[スポーツ社会学] [ボディビル競技] [のめり込み]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**I. 緒言**

ボディビル競技は以前より、薬物問題を抱えてきた。例えば、世界アンチ・ドーピング機関(2020)によると、2019年にボディビル競技で実施されたドーピング検査の陽性率は20%と非常に高かった。また、プロボディビルダーの間では薬物使用が公然の秘密とされるほどに普及しているとの指摘もある(増田, 2000)。これらの薬物問題に加え、ボディビル競技では過度な減量により死亡した競技者の存在が報告されている(東京新聞, 2020, online)。以上を踏まえるとボディビル競技には、たとえ薬物使用までは至らずとも、競技に強くのめり込む競技者が数多く存在すると考えられる。

このような状況の一方で、ボディビル競技に関する先行研究は、例えば、ボディビルダーの基礎代謝と身体活動レベルの検討を行った山本ら(2008)や除脂肪及び筋肥大の最適な方法を確立することを目的とした岡田ら(2015)など、その大半を占めるのが競技方法に関する研究や生理学的な研究であり、社会学的な研究は竹崎の一連の研究(2015, 2019)に限定されている。

そのうち、竹崎(2015)は男性高齢者ボディビルダーを事例に、彼らがいかにしてボディビルの価値を構築しているのかについて分析を行い、男性高齢者ボディビルダーが自身にとってのボディビルの価値を「身体」を媒介とした「普通の高齢者」との差別的関係から認識していることを明らかにした(竹崎, 2015, pp. 54-56)。一方で、ボディビルダーではない「普通」の者たちがどのようにしてボディビルダーとなっていくのか、という動的な過程については明らかにされていない。

また、竹崎(2019)は日本のボディビル文化を対象とした歴史研究を行い、ボディビル文化が戦後占領期にアメリカから日本に導入され、日本における男性身体の意味が変容した一方で、ボディビルにおける理想の身体像も「日本人」男性としてのあり方との葛藤の中で変容していった過程を明らかにしている(竹崎, 2019, pp. 689-702)。しかし、特定の日本人男性がなぜ、ボディビルダーとなっていたのか、という動的な過程については先の論文と同様に論じられていない。

以上の先行研究の検討を踏まえ、本稿ではボディビル競技者が競技へのめり込む要因とその過程を明らかにすることを目的とする。

II. 分析枠組み

特定の行為者が競技者となり、その社会的世界へと没入していく過程について分析した研究として、石岡(2012)やヴァカン(2013)のボクシング研究が挙げられる。本研究ではこの石岡やヴァカンの議論を踏まえ、「肉体と競技者」「競技者と競技空間」「競技空間と生活空間」という3つの位相に着目して分析枠組みを設定した。また、本研究ではこの分析枠組みを踏まえ、次のような仮説を設定した。すなわち、第一に競技者は自身の肉体を絶えず内省し肉体に修正を施していく一方で、過去の記録(過去の自分)と競技実践を行うことでもたらされる成果(未来の自分)に条件・方向づけられ、競技へのめり込んでいくのではないか、また第二に競技者はボディビル競技における競技空間に身を置くことで十全なボディビル競技者と化していくと同時に、競技空間と生活空間の論理とが作用しあうことで競技へのめり込んでいくのではないか、という仮説である。

III. 調査概要**1. 調査対象者**

本研究ではボディビル競技のコンテストに出場経験・予定のある競技者計11名を調査対象者とした。

2. 調査方法

半構造化面接法によるインタビュー調査を一人当たり2時間実施した。

3. 主な質問項目

本研究における主な質問項目は、①競技に関する個人史(ボディビル競技との出会い、競技実践の変化、競技に対する意識の変化)、②競技者と肉体(鏡に映る自身の肉体の捉

研究成果の概要 つづき

え方、自身の肉体に対する評価)、③ 競技者と競技空間 (競技者にとってのジムとは、ジムにおける他の競技者との交流について)、④ 競技空間と生活空間 (私生活の送り方、日常生活に競技が占める割合)、⑤ 競技実践 (現在のトレーニングメニュー、食事内容)、⑥ 競技意識 (一見苦痛を伴うように思える競技実践を続ける理由、自身にとってのボディビル競技とは)である。

4. 分析方法

本研究では修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて分析を進めた (木下, 2003)。具体的な手順としては、① データの逐語化、② オープンコーディング (データから概念を生成)、③ 選択的コーディング (概念と概念の関係を検討し、カテゴリーを生成)、④ 概念、カテゴリー間の関係を結果図として提示、である。M-GTA を採用した理由としては、本研究が M-GTA の特徴であるプロセス的性格を有していることに加え、M-GTA を用いることでデータに即した分析結果を得ることができ、得られた知見を実践的な現場へ還元しやすくなるためである。

IV. 結果

分析の結果、38 の概念と 7 つのカテゴリーが生成された。ここで 7 つのカテゴリーとは、【目的化するウェイトトレーニング】【ボディビル競技者化する見習い競技者】【「足りない」筋肉】【ボディビル競技へと収斂する私生活】【「抛りどころ」となるボディビル競技】【「一輪車化」するボディビル競技者】【拡大せざるを得ない肉体への「投資」】である。また、調査結果を要約するならば以下のように論じられる。

まず第一に、競技者は身体パフォーマンスを向上させるためなど、他の目的を達成するための手段としてウェイトトレーニングを開始させていた。ここにおいて競技者は、一方では、「筋肉は努力を裏切らない」という経験、また他方では、ボディビル競技以前に行っていた競技において「努力を裏切られる」経験をしており、これら二つの対照的な経験を経ることによって、当初ウェイトトレーニングを行う動機であった目的を大きく後退させ、ウェイトトレーニングそれ自体を目的化している様相が看取された。

また第二に、ウェイトトレーニングを目的化させた競技者は、ジム空間に身を置くことや他の競技者と関わり合うことによって、ボディビル競技における技能やものの見方を学習し、より十全なボディビル競技者と化していくことが示唆された。一方で、ボディビル競技のものの見方を学習した競技者は自身の肉体を内省する中で、自分の肉体が「未完」であることを強く意識せざるを得なくなり、この肉体に対する不完全さの感覚がボディビル競技者を競技へとめり込ませる要因となっていることが推察された。

そして第三に、自身の肉体の修正点を見出した競技者は、自身の肉体を思い描く理想の肉体に近づけるために、私生活を競技へと収斂させることによって筋肉を発達させようと試みていた。ここで競技者が私生活を競技へと収斂させる理由、それは筋肉を発達させるにはウェイトトレーニングを行うだけでは不十分であり、適切な栄養を適切なタイミングで摂る必要があるためであった。

このようにして競技者が私生活を競技へと収斂させていった結果、競技者にとってのボディビル競技は、アイデンティティの支えや社会的承認の獲得手段、生き甲斐という意味において「抛りどころ」と化していくことが示唆された。一方で、ボディビル競技が競技者の「抛りどころ」となることによって、競技者は「成長」を維持することができなければ心的な安定性を獲得することができないという状況に置かれることとなり、「成長」に対する追求が強迫的に強化されていることが推察された。

競技者の「成長」に対する追求がこのようにして強化される一方で、肉体に対する「投資」は徐々にその「利回り」が低減していくために、競技者は肉体に対する「投資」を拡大させ続けなければ「成長」を維持することができないということが明らかになった。また、ここにおいて肥大化していく肉体に対する「投資」は、結果的に、私生活の競技への収斂をより一層先鋭化させることへと帰結しており、競技者の「成長」に対する追求は強迫的かつ自己増強的に強化されていることが推察された。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ その他

口頭発表

- ・ 日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会
「ボディビル競技における『のめり込み』を惹き起こす要因とその過程に関する実証的研究」
- ・ 日本スポーツ社会学会第31回大会
「ボディビル競技における『のめり込み』に関する実証的研究－競技者の『道理性』に着目して－」
- ・ 「日本スポーツ社会学会 2021年度第2回学生フォーラム」
「ボディビル競技における競技者の『信』に関する一考察--競技者はいかにして自身の『理想』を信ずるのか--」